バレンタインデー ドキドキ事件！

相羽ゆい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バレンタインデー ドキドキ事件！

【Nコード】

N4532B

【作者名】

相羽ゆい

【あらすじ】

主人公の中原エリカは、バレンタインデーの日に、同じクラスの前田くんにチョコを渡す！・・・はずだったのだが、持ってきたはずのチョコがない！！エリカは前田くんに、チョコを渡すことができなのかな・・・？

始めに

こんにちは、この小説の作者の相羽ゆいです！

今回は小説に初挑戦！・・・ということ、下手な小説が出来上がると思います。

でも一生懸命書いたので、途中で変だと思っても、気にしないで下さい・・・^^；

それでは第1話からどうぞ！

第1話

「ふわああああ・・・」

私・中原エリカは、授業中だというのに、先生の話がちつとも聞いていない。

席が窓側なので、グラウンドをじっと見ているのだ。

グラウンドでは、2年生が体育の授業で鉄棒をやっていた。

エリカの学年は、6年。鉄棒はもうやらない。

鉄棒をやっているところを見ると、低学年のときを思い出すのだ。

（あの頃は体育、得意だったんだよね・・・）

ため息をつき、黒板の方を見た。

黒板は図やら文やらで、ごちゃごちゃしていた。

「2時間目はこれまで！ちゃんと全部写しとけよー」

やっと2時間目の授業が終わった。

2時間目が終わったら、中間休み！

エリカは喜びのあまり、スキップをしながら教室を出た。

「中原っ！！」

教室から出た瞬間、先生が大声でエリカを呼んだ。

「お前また授業、ちゃんと聞いてなかっただろ？」

先生の言葉に、息がつまるエリカ。

「ちゃ・・・ちゃんと聞いてましたよ！」

嘘をついたエリカの声は、震えていた。

声が震えていることに、当然気がついた先生は、

「ふーん？だったらノートを見せてみなさい」

エリカ絶体絶命のピンチ！？

（ここで捕まったら、私の努力が・・・！）

エリカはギュッと握りこぶしをつくり、先生をにらんだ。

その瞬間！

エリカは先生の横をササッと猛スピードで通り、そのまま走っていった。

「あっ！中原っ！！」

先生はそのまま動こうとせず、ずっと走っているエリカを悔しそう

に見ていた。

第2話

「ハア・・・ハア・・・」

エリカは乱れた息を整え、地面に座り込んだ。

（グラウンドまで逃げてきちゃった・・・）

ため息をつき立ち上がり、スカートについた土をはらった。

ふと時計を見ると、中間休みはあと10分だった。

「あ、あ、あ・・・あと10分！！？」

エリカは急いでグラウンドを走った。

そして倉庫にある、フラフープを取り出した。

エリカは毎日、お腹を細くするために、フラフープをしていたのだ。

（バレンタインデーまで、あと10日かぁ・・・）

実はエリカは、同じクラスの前田くんに片思いしていたのだ。

「絶対バレンタインデーまでに痩せて、チョコ渡すんだからっ！」

エリカはいつもより気合を入れて、フラフープをまわし続けた・・・。

「キーンコーンカーンコーン……」

中間休みが終わり、チャイムが鳴った。

（次は……体育の授業だ！）

エリカは嬉しいような悲しいようなで、席についた。

エリカが一番嫌いな教科……。それが、体育なのだ。

でも今エリカは、ダイエット中。思いっきり運動できる体育は嬉しい教科。

エリカは体育のことで、頭がいつぱいになった。

「じゃあ着替え終わったら、体育館に集合だ！」

先生の声も耳に入らない……。

ずっと席に座りっぱなしでいたら、友達のサオリ

「エリカ、はやく着替えないと遅れちゃうよ……！」

と、言われたエリカ。

サオリの声も当然、耳に入っていなかった。

そんなエリカにあきれたサオリは、

「……じゃ、先に行くわよ！」

と、声をかけ、みんなと一緒にグラウンドへ行った。

第3話

みんなはもうグラウンドへ行き、教室にはエリカだけ。

静かな教室にハツとしたエリカ。

「え……！もうみんな行ってる!？」

とにかく急がなくてはとエリカは、とりあえず体操服に着替えた。

着替えた後は言うまでも無く、エリカは猛スピードでグラウンドへと向かった。

グラウンドに着くと、エリカは一安心した……のだが、みんなが居ないことに気づく。

(ど……どうしてみんな、居ないの!?)

あせるエリカの足元に何か落ちていた。

拾ってみると、それは紙だった。紙にはこう書いてあった。

『遅れた誰かさんに、お伝えします。』

みんなは今、体育館に居ます。

急いで来てください！ 先生とみんなより』

ふざけ半分に書いてある文を読み終わり、自分に腹が立ってきた。

(先生の言葉、ちゃんと聞いておけば良かったー・・・！)

授業が終わるまで、あと15分。エリカはしぶしぶ体育館へと向かった。

「ガラッ・・・」

体育館の扉を開けた。みんなはボールを使い、自由に遊んでいた。

「中原、ずいぶん遅かったなあ？」

少しニヤニヤしながら先生が言った。

(む・・・ムカつくー!!!)

エリカも負けず、殴り倒したい気持ちを抑え、ニコニコ言った。

「ええ、体操服がなかなか見つからなかったんですよ」

先生は、(ふーん・・・)という顔でエリカを見た。

「ま、とにかく遅くなったが・・・授業を始める」

(ふうふう・・・。やっと授業を受けれるわ)

と思ったが、ハッとした。

(あれほど悩んでいた体育を、こんな簡単に認めても良いの!?)

またまたエリカは体育のことだけを頭に入れた。

でも授業は授業。ちゃんと受けなくちゃいけない。

エリカは（ダイエットのため!）ということので、いつもより頑張った。

「キーンコーンカーンコーン・・・」

授業終了のチャイムが鳴った。

（はあああ・・・。やっと終わった!）

エリカの額には汗がたっぷり付いていた。

「これで体育の授業を終わる!」

先生の言葉を聞き終え、みんなで教室へと帰っていった。

第4話

4時間目は2時間目と同じく、授業を聞かず外ばかり見ていた。

(本当にこんな私が、前田くんにチョコ・・・渡していいのかな?)

実はエリカ、前田くんチョコを渡そうかどうか、悩んでいたのだ。空はこんなに晴れているのに、エリカの心は雨がザアザア降っている。

大きいため息をつき、ちらっと前田くんを見た。

前田くんは、まじめ。テストではいつも良い点ばかり取っている、天才くん。

エリカはそんな前田くんを見習った。それと、前田くんはちょっとミステリアス。

前、前田くんの後をこっそりついて行ったら、何故かグラウンドに来てしまった。

前田くんは運動が苦手。

(なのに・・・、どうして?)

と、エリカはとても不思議だった。でも途中、見つきりそうになりついて行くのをあきらめた。

それからずっと前田くんを観察していた、エリカ。

そして、観察していて気づいたことがある。それは、一日一回は絶対、親切をしていること。

その姿を毎日見ていて、エリカは前田くんを好きになってしまった。・・・と、いうわけである。

(前田くんの良いところといえば・・・。ちょっとカッコいいところ)でしょ。それから、親切なところ!あとは・・・)

前田くんの良いところは、沢山ある。数えたらきりがなくらい・・・。

でも、前田くんはあまりみんなには、そういうところを見せない。

(意外に前田くん・・・、シャイだったりして!)

そんなことを考えているエリカは、ほっぺが赤く染まり、ヘラヘラなってしまう。

こういうときに限って、先生がエリカを当てる。

「中原、何ニヤニヤしてるんだあ?この問題、答えてみなさい」

エリカはみんなに笑われ、余計顔が赤くなった。

「え、えと・・・、分かりません!」

エリカは戸惑いながら、きっぱり言った。すると先生は、

「分からない・・・？聞いてないだけだろう」

と、エリカをにらんだ。エリカは冷や汗を沢山かいている。

するとそのとき・・・。

「先生、この問題、僕わかります」

と、前田くんがエリカの代わりに問題を答えてくれることになった。

安心したエリカ、またまたほっぺが赤くなった。

（やっぱり、前田くんって優しくて・・・好き！）

第5話

「あの・・・4時間目のときは、どうもありがとう！」

エリカは前田くんに4時間目のお礼を言った。

前田くんが誰かと話してるときなど、一度も見たことがないから、返事はしないと書いた。

「・・・ああ、あれね。別に簡単な問題だったし・・・」

前田くんはそっけなく言うと、教室から出ていった。

(そっけない返事・・・でもそこがまた、クールで良いんだよねえ・・・！)

エリカはすっかり、浮かれていた。

「わたし絶対、前田くんにチョコ渡す！」

エリカは決心したのだった。

給食時間、友達のサオリと一緒に、バレンタインデーのことを話した。

「ねー、エリカ。バレンタインデー、男子にチョコあげる？」

サオリの言葉に、とまどうエリカ。

「え、え・・・っと、サオリは!？」

顔が赤くなるのが自分でも分かるほど、顔が熱い。

「んー、あたし?あたしはいないなあ・・・」

サオリはゆううつそうに、ひじを机につき、ため息をついた。

(サオリには、好きな人・・・いないんだ)

エリカはしょんぼりし、考えた。

(六年で好きな人って早いのかなあ・・・?)

ふと空を見上げると、雪がちらちらと降っていた。

「あ、サオリ・・・、雪降ってるよ!」

エリカは窓の外を指差し、サオリに言った。

「あ、本当だ・・・。雪、きれいだねえ」

につこりしながら、サオリも雪をずっとながめた。

ゆっくりと舞うように降っている雪は、恋する女の子に応援のダンスをするようだった。

その光景をながめているエリカは、ちよっぴり元気が出た。

エリカ達は、雪見をしながら給食時間を終えた。

第6話

「寒ーいつー!!」

昼休み、フラフープをするため、外に出たエリカはガタガタ震えていた。

まだ雪が止んでいなく、グラウンドには、いつもより少ないが元気に遊んでいる人達がいた。

雪はまだ小さく、吹雪というほど降ってはいなかった。風もあまり無かった。

(ああ、寒い……。でもこれも、恋の試練なのよ！)

エリカは「恋の試練」という言葉を胸に秘め、熱く燃えていた。

(絶対ぜーったい、チョコ渡すんだからあ！)

勢いよく、フラフープを回す。くるくるくるくる……。と。

「キーンコーンカーンコーン……」

昼休みが終わり、フラフープを倉庫へと直す。

「うわああ……」

エリカは思わず、びっくりしてしまった。

倉庫の中は、一輪車やら、フラフープやらで足元がゴチャゴチャしていたからだ。

「これじゃあ、足の踏み場もありやしない……」

困ったエリカ。とりあえず、足元にある一輪車達を隅っこに寄せた。そして、さっきまで使っていたフラフープを、元の位置に戻す。

「ふうう……。あつ！ 五時間目、国語じゃん！」

エリカは隅っこに寄せた一輪車達を置いて、教室までダッシュで帰っていった。

「ガラッ……」

教室のドアを開け、自分の席へと戻るエリカ。

（よかった、先生まだ来てなくて……）

運がよいのか、先生はまだ教室には来ていなかった。

そのためだろうか？ 教室全体が、騒がしくなる。

女子は友達とお喋り、男子は教室の後ろで遊んでいる。

でも、隅っここの席に座っている、前田くんだけ、外をながめていた。

その姿をエリカは、じーっと見つめる。

(前田くんは今、何を見ているんだろ？ 何を考えてるんだろ？)

エリカは目を閉じた。そして息を吐き、机にうつぶせになった。

(ああ……。このままずっと授業中、寝ておきたいな……)

机にかかる、暖かい光。外から入ってくる、暖かい風。

(冬なのに……。どうしてこんなに暖かいの？)

エリカはウトウトし始めた。睡魔に襲われつつあるのだ。

「もー、ダメえ……」

力の抜けた声でエリカはそう言い、夢の世界へと旅立った。

第7話

何時間たったのだろうか？エリカは周りがザワザワするのを感じ、目を覚ました。

「あああああ……！ あたし、コロッケがあるんだった！！」

意味が分からない言葉を発言し、エリカは飛び起きた。

「あ、あれ……？ ここ、あたしの部屋？」

起きてみると、エリカは自分の部屋の自分のベッドにいることに気がついた。

（学校にいたのに……。なんで？）

でもエリカは、制服姿だった。学校にさっきまでいたことには、間違いないようだ。

とりあえず、私服に着替えることに。

（明日、サオリにでも聞こうつと……）

着替え終え、エリカはまたベッドに寝転がった。

エリカの目には、天井が写っていた。……が、前田くんを妄想していた。

（も……もしかして、前田くんがあたしの家まで運んでくれたと

か！？)

頭の中に、前田くんがエリカをお姫様抱っこしているところが思い浮かんだ。

「・・・んなわけ無いよねえ」

枕に顔をふせる、エリカ。そのまま再び、宿題もせず、夢の世界へと落ちていった。

「リリリリリリ・・・！」

エリカの部屋から、朝一番に目覚まし時計が鳴る。

「・・・あわわわっ！ もうこんな時間！」

エリカは目覚まし時計を止め、急いで着替えた。

「ドタドタッ」っと、階段を下り、急いで朝食。

「あ、エリカ。早くしないと、遅刻するわよ！」

母がエリカをあせらす。

「いってきまーす！」

靴をはき、「バタンッ」とドアを開け、家から飛び出す。

「タッタッタッタ・・・」

エリカの足音が、長く続く。そしてようやく、学校に到着。教室に入り、前田くんが読書をしているのが目に入った。

そこでエリカは気づく。

（明日、バレンタインデーじゃん！）

第8話

外からは気持ちがい風が入ってくる。

(もつじき春なんだ……)って思わせるくらい、暖かい。

今の季節は冬。今日は2月13日だ。

明日の14日は、「乙女の日」だ。だって、バレンタインデーだから。

もちろんエリカもドキドキしていた。

(ああ……。明日、前田さんにチョコ渡すんだ。やっと気持ちが伝わるんだ!)

高鳴る胸を押さえ、席についた。後ろの方で、何やら女子達が集まっている。

バレンタインデーのことを話しているのだ。

(みんなもやっぱ、あげるのね。男子にチョコ……)

机にひじをつき、エリカはほっとした。

……その瞬間、大きな声がひびいた。

「山田、前田にチョコあげるんだってなー！ お幸せにー！」

笑いながら男子が女子の山田さんに言った。

「ちよっ……！　嘘言わないでよねー！」

山田さんは、顔を赤く染め、男子の頭を「パチン」と叩いた。

（先生がいなくて、良かったー……！）

エリカは先生がいないことに、感謝した。

……が、ある重大なことに気づく。

（え……。前田くんにチョコあげんの！？）

前田くんはまだ読書をしていた。さっきのが、聞こえたのか聞こえてないのか、分からない。

「……前田くん」

自分だけが聞こえるくらの小さな声で、エリカはつぶやいた。

エリカの目から、前田くんの姿がどんどんぼやけていくように思えた。

（あたし……。前田くんにチョコあげても、良いよね？）

エリカの心は、小さな針が刺さったみたいに、チクンッと痛んだ。

第9話

「ただいま！」

エリカは家に帰り、「タタッ」と階段を登った。

「ふううー……」

ベッドに寝転がり、服を脱ぐ。そして私服に着替える。

1月頃を買っておいた、バレンタインチョコの本を手取る。

「むむむ……。どれ作ればいいんだろ……」

「うーん……」と難しい顔をし、エリカは悩んでいた。

「エリカー、ご飯よー！」

一階から母が大声でエリカを呼ぶ。

「あ、はい！ 今いくー！」

今まで読んでいた本をベッドの上にはいたらかし、一階へと下りるエリカ。

「エリカ、宿題はもう済んだの？」

母がエリカに聞く。エリカはギクツとした。

「え・・・、うん、もちろん！・・・まだだよ」

ボソリと小さな声で、母に苦笑いし、言った。母は、あきれてものが言えないみたいだった。

「ごちそうさまー！」

食べ終わり、また自分の部屋へと戻り、急いで宿題を始めたエリカ。

(うとうう・・・。明日、バレンタインデーなのに・・・。チョコ作らなきゃいけないのに・・・)

苦しい思いをし、バリバリ宿題を進めていくエリカの姿は、ラブレターを書いているようにも見えるほど、気合が入っていた。

そして、宿題が終わった後にチョコ作り。

結局エリカは、夜の11時30分に寝ることになった。

そして朝は、寝坊。

「うわあああああ！！！！」

起きたらなんと！8時ではないか。学校には、8時15分に着かなくてはいけない。

(ああああ・・・、あと15分！？)

パツパツパツ！つと着替え、朝食、歯磨きを終え、大急ぎで学校へと向かうエリカ。

「・・・おっと、チョコ忘れてた！」

家を出て、はっと気づく。そして家へチョコを取りに行く。

(ふうふう・・・。早めに気づいて、よかった！)

チョコを手提げに入れ、学校へと猛スピードで走っていった。

第10話

「おはよー!」

「ハアハア・・・」と、息を荒くしつつ、エリカは元気にあいさつをした。

「あ、エリカ。おはよー」

サオリが体をひねり、こちらを見、にこにこしながらあいさつする。

「ねえ、エリカ。今日は・・・何の日か知ってる?」

サオリがエリカに、質問をする。

エリカは「知ってるに決まってるでしょ!」と、いう顔でサオリを見る。

「あははっ、さすがに恋愛に興味なしのエリカでも、わかるか」

少しからかっているみたいに笑い、そしてエリカを指でチヨンチヨンつつつついた。

「エリカも本当は、誰かにあげるんでしょ!？」

エリカは「ふううー・・・」とため息を一つつき、答えた。

「もう! 誰にもあげないっていったでしょ」

と笑いながら、サオリの方を向いた。サオリは、

「そっかぁ……。やっぱり、エリカは恋愛興味ないんだー……。と、ちょぴりガッカリしたようにつぶやいている。

(サオリ……。ごめん、今は言えないよ……)

そんなサオリを見つめ、エリカは心がちょっとだけ、痛くなった。

「……で、サオリは誰かにあげんの!？」

気を取り直し、明るくサオリに聞いてみたエリカ。

「え、わたし? うーん……。どうだろう……。」

悩むように言うサオリ。エリカはすかさず、つつこむ。

「えー? あたしに聞いておいて、サオリはまだ決めてないのぉー?」

二人はクスクス笑い合い、その次に山田さんの話になった。

「山田さん、前田くんにチョコあげる……。って言ったよね」

サオリがポツリとエリカにつぶやいた。

エリカはドキツとした。

(そうだった……。早めにあげていた方がいいよね、チョコ?)

悩みが多い年頃のエリカ。頭の中には山田さんと前田くんが重なり合い、その上にチヨコ、チヨコ、チヨコ……。

「そうだねえ……。山田さん、本当にあげるのかな？」

エリカは無理やり笑い、サオりに聞いた。

サオリは「どうかなあ？」と考えながら笑っていた。

エリカも続き笑いながら、「ただの噂だったりして……。」「と、良い方向へと勝手に進んで行った。

そして、1時間目が始まるまでずっと、エリカとサオリはバレンタインのことを喋り続けていたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4532b/>

バレンタインデー ドキドキ事件！

2010年10月30日04時56分発行